同志社大学先史学会

『実習室だより』復刻版

（1957・1958・1961・1962年　⇒　2021年）

EVE祭先史学研究会主催「裏日本の古代遺跡」展
1959年11月26～29日　寧静館１階会場にて

2021

同志社大学考古学研究室

同志社大学歴史資料館

例　　言

1．本書は、同志社大学先史学会（代表：酒詰仲男）が1957年から1962年まで合計で13回発行した『実習室だより』をまとめて復刻したものである。なお、第２巻第１号は第12号、第３巻第１号は第13号と便宜的に表記した。

2．同志社大学における「実習室」とは、本来考古学実習の授業をおこなう専用の教室であるが、同時に考古学を研究する学生が集う部屋でもある。酒詰仲男先生時代は「先史学実習室」と呼ばれていたが、その後は現在まで「考古学実習室」と呼ばれている（酒詰先生の日録では1962年以降に「考古学実習室」という文字が見える）。その場所は今出川キャンパスの同工館（1957年）をはじまりとし、新町キャンパスの臨光館（1962年）、臨光館横プレハブ（1985年）を経て、現在の渓水館（2004年）へと都合４回変遷した。

3．『実習室だより』は、1957年４月から1958年２月まで毎月11回発行され、その後は1961年11月（第12号）と1962年９月（第13号）に２回発行された。編集は第１～11号までは岡田茂弘氏、第12・13号は酒詰先生がおこなうが、実際の記述についてはその筆跡から第６号以降の多くは酒詰先生によるものと考えられる。

4．本書は、第Ⅰ部：『実習室だより』原本抜粋、第Ⅱ部：『実習室だより』復刻版、第Ⅲ部：酒詰仲男先生門下生の回顧集、第Ⅳ部：編集後記―あとがきにかえて―、によって構成される。なお、全体を通じて、記述された出来事とその年月日に何か所か不整合が認められるが、各自の記録と記憶を尊重し、大勢に影響がない限り原文のままとした。

5．本書のうち、第Ⅱ部：原本のデジタル化では、極力原文通りを心掛け、明らかな漢字の誤字以外、例えば送り仮名などはそのままの表記とした。ただし、間違っていても当時の雰囲気が出ていると考えられる部分については敢えて（ママ）として残した（一部現在的には差別的表現も含む）。その上で、解読できなかった文字については「●」で表記した。また、「新収書目・図書」については割愛した。なお、各号の冒頭のタイトルと最後の奥付は、実際は各号で不統一であるが、誤解・混乱を避けるため、およそ統一した表記としている。個人の住所などの表示は個人情報の保護の観点から特定できない記載方法をとった。

6．第１～３号は大石雅興（2019年度大学院修士１回生）、第４・５・12・13号は大西早織（学部２回生）、第６・７号は辻直幸（学部３回生）、第８・９号は公門杏実（学部１回生）、第10・11号は原田侑里（学部１回生）がそれぞれデジタル化（文字の打ち込み）をおこない、伊藤久嗣氏による校正を経て、同志社大学歴史資料館の若林邦彦・浜中邦弘両氏の協力を得ながら、全体の編集は水ノ江和同がおこなった。

目　　次

《第Ⅰ部》『実習室だより』原本抜粋

第１・２・３・７・11・12号 …… 6

《第Ⅱ部》『実習室だより』復刻版

実習室だより 第１号　Apr.5 ……24

第一回総会から

１．概要　２．組織　３．出版物　４．会費（月額）　５．本年のプラン

掲示板

実習室だより 第２号　May.5.1957 ……26

今年度第一回例会から

１．先史学と自然科学（岡田茂弘）　２．北海道の考古学（千代　肇）

３．同志社先史学会のあゆみ（石部正志）　４．構内遺跡案内（森　浩一）

掲示板

実習室だより 第３号　1957年６月10日 ……29

神奈川県相模川支流の一横穴古墳（酒詰仲男）

三重県霊山発見経塚の踏査（坪田嘉子）

瀬田町東洋レーヨン内遺跡見学記（嶋瀬晃栄）

第二回例会から

亀岡市池尻坊主塚古墳発掘報告（安井良三）

大阪四天王寺趾発掘に参加して（岡田茂弘）

掲示板、編集後記

実習室だより 第４号　1957年７月20日 ……35

発掘調査の組織について（鈴木重治）

発掘の許可制をめぐって―荒される埋蔵文化財について（石部正志）

６月例会から

北海道天売・焼尻島の調査（石附喜三男）

掲示板、編集後記

実習室だより 第５号　1957年８月20日 ……41

宮崎県川南町把言田遺跡について（鈴木重治）

畿内における古墳の破壊状況（石部正志）

井戸端会議（酒詰仲男）

実習室だより 第６号　1957年９月20日 ……49

一壺の価値―奈良の考古学協会総会から―（酒詰仲男）　実習室消息
奈良県大川遺跡予察紀行
実習室だより　第７号　1957年10月20日 ……54
青森県最花貝塚発掘断章（酒詰仲男）　掲示板
実習室だより　第８号　1957.11（1957.12.10）……59
奈良県大川遺跡の発掘（酒詰仲男）　網野紀行（酒詰仲男）　掲示板
実習室だより　第９号　1957.12.31 ……65
洛北遺跡処々（酒詰仲男）　発掘調査の組織について（鈴木重治）
卒論紹介１
　１．東　宏美「日本のケールンについて」
　２．池谷和三「埴輪考―特に奈良県と群馬県の比較―」
　３．北中　叡「考古学上より見たわが国塔婆の一考察」
同志社先史学会々則　掲示板
実習室だより　第10号　1958.1.21　⑧－２＝⑥ ……72
先史考古学（酒詰仲男）
卒論紹介２
　４．嶋瀬晃栄「滋賀県の古墳」　５．横野和夫「南河内の古墳」
　６．古田昭夫「硬玉製大珠について」
掲示板
実習室だより　第11号　1958.2.21 ……77
文化財保護について（酒詰仲男）　掲示板
実習室だより　第２巻第１号　第12号　1961.11.1 ……81
ご挨拶　近況　主な出来ごと（昭和33年）
実習室だより　第３巻第１号　第13号　1962.9.20 ……88
ご挨拶　近況　OBの動静　主な出来ごと　あとがき

《第Ⅲ部》　酒詰仲男先生門下生の回顧集 ……95
鈴木重治（1953年度生）　「1950年代中葉、恩師・先輩・発掘調査とその時代」
岡田茂弘（1957年大学院入学）「同志社大学先史学会の『実習室だより』創設の頃」
白石太一郎（1957年度生）「同志社大学の考古学研究室と考古学研究会」
伊藤久嗣（1959年度生）　「追想」
細見　克（1959年度生）　「今ある私の原点―考古学と出逢った場所―」
堀江門也（1962年度生）　「『実習室だより』を繋ぐ」

《第Ⅳ部》　編集後記ーあとがきにかえてー（水ノ江和同） ……109

《第Ⅰ部》『実習室だより』原本抜粋

第１・２・３・７・11・12号

実習室だより

NO. 1

同志社大学先史学会発行　Apr. 5

「第一回総会から」

過日（3月21日）実習室で行なわれた先史学会総会で発言された内容を簡単に纏めてみた。

1

総会で話題となった主な点は、これからの研究会の活動を、どのようにしたら良いかということであって、まず酒詰先生から、ここ数年来の研究会活動の欠陥の指摘を中心としての報告があり、「初めは、山陰を計画的にやりたかったが、経済的にその条件がなかった。アトラニタムに調査がやられても成果は充分にあったと思われるし、わるい事ではないので、現状からしてやむを得ない。」と発言された。活動を系統的に行い度いという意見は、誰れしもが認めており、条件に悪いところがあっても、とにかく組織的な研究グループとして会を育てあげようという意見が支配的であった。

組織的な活動については、共同のテーマを一つ定めても良いのではないかという意見（森さん）も出され、又研究室に関係する人が、一週に一度でもよいから、研究室の時間を特別に設け、その時間は私的な仕事でなく、共同して一つの仕事をしようという意見（石部さん）も出されている。

1号－1

2 組織

組織については、会員の他に、積極的に協力して下さる人達が同志社外におられる事だし、この人達のためにも又、新しく参加して下さる人達のためにも、「会友」を設けて置く事が望ましいという意見が出され、これを全会は認めた。

活動をスムースにするために会の運営について、責任を持つ委員を置く事が決められ、委員達は、より多く意見を交換するための場を持つ事が要請されている。

委員、森 浩一，石部正志　その他二名。

3 出版物

機関誌の出版については、これまで行なわれていなかったのであるが、研究会のこれまでの成果とか、卒論のうち良いもの、etc. を何らかの形で出版したい、というのが現在の全体の意見となっている。

4 会費　（月額）

学生は、　50円

大学院以上及び会友は、　100円

5 本年のプラン

Ⓐ 網野（縄文）　Ⓑ 能勢（古墳）　Ⓒ 北海道

本年度の総会は、参加した人達も少く、意見も多くは交換されず、また限られた時間内で開かれたので、出された問題を充分に話し合う事は出来なかったが、それでも考慮さるべき問題は多くあったようである。（文責 スズキ）

1号－2

実習室だより NO.2

（同志社大学先史学会）　MAY.5.1957.

今年度第一回例会から

今年度の第一回例会は、去る4月23日（火）の午后2時30分より寧耕館42番教室に於て、新入会員の歓迎会をかねて行われた。会は酒詰教授の挨拶に続いて下記の4氏による講演が行われ盛会であつた。

1、先史学と自然科学 ---------- 岡田茂弘氏
2、北海道の考古学 ---------- 千代 肇氏
3、先史学会のあゆみ ---------- 石部正志氏
4、内蒙跡案内 ---------- 森 浩一氏

〔講演要旨〕　先史学と自然科学　　岡田茂弘氏

先史学とは何かに就いては、今更説明する迄もないと思うが、之を一言をもつて表わせば、「残されに先史時代の事実・事物等の資料の比較研究によつて先史時代の人間の文化及びその環境を研究する学」と云う事が出来よう。それ故明らかに man science の一分野である。それに対して自然科学は生命現象に関係あるもの、無いものを問わず直接に人間の関係して来ない自然に存在するものを対象とし、自然現象を研究する学であるから、先史学などの人文科学とは、例え部分的に同一な事柄を取扱う事があつても各々目的を異にするものであり、学問の分類の上からみると全く別の科学であると云つてさしつかえない。貝塚の貝の殻に自然科学的な研究材料を先史学が取扱うために、屡々先史学は自然科学の一分野か、若くは自然科学と人文科学の中間的性質を有するかのように見られる事があるが、これは認識不足な観方であり、先史学は研究の手段として自然科学的技術を借りているにすぎないことを認識する必要がある。

2号－1

掲示板

◇考古学専攻の昨年度卒論は次の通りであつた。

糸谷繁朗 大阪府堂ヶ山遺跡について
宮田 宏 石石見正
外石瑞次 兵庫県保久良神社に就て
大森栄一 考古学上より観たる中河内
沢田 一 環濠集落について
鈴木重治 住居址（回顧と展望）
多武利男 大阪府千里山丘陵の諸遺跡
武田佳治 縄期・弥期・縄文式文化の一考察（特に土器の形態・文様の推移と縄文式・弥生式文化の葬制の比較）
坂上博 都弥遺跡の古墳

◇森浩一君は殖恵奨学金に応募され、大学院博士課程へ進まれた。

◇本年度の考古学専攻者は古田昭夫・東宏美・池谷和三・北中敏・三好敏夫・沢田禎夫・鳴瀬晃栄・横野和夫の8君である。

◇糸谷君は大阪印刷インクK.Kへ、外石君は日本電々公社へ、沢田君は奈良市東向の商事会社へ、鈴木君は宮崎博物館へ、岸本晴君は北陽高校へ夫々就職された。

◇本年度の大学院博士課程考古学専攻の在籍者は石部正志・森浩一の二君、修士課程の方は坂田直・宇田川誠一・岡田茂弘（新入）の三君。

◇日本考古学協会春季総会で、本会の石部正志・安井良三の両君は入会を認められた。

◇広都富美子氏は4月20日細川計明氏と華燭の典を挙げられた。

◇岡田茂弘君は目下文化財保護委員会主催の四天王寺址の発掘に参加されている。

◇北海道
◇北海道調査旅行参加者　至急申込まれたい。詳細は希望者（申込者）に通知する。

◇五月中に本年度分会費金額を納入した方に限り年額1000円にします。

昭和32年5月5日発行
発行者　同志社大学先史学会
代表　酒詰仲男
発行所　京都市上京区今出川通烏丸東入
同志社大学先史学会

2号－4

しかしながら、実際問題として先史学の研究材料の大部分が残された事物・事象であるため、材料の処理にあたつて非常に多くの自然科学的技術が取入れられているし、より高度な自然科学の技術及び成果を利用すればするほどよい結果が得られることも事実である。例えば動物相・植物相・地形発達史の研究による当時の食生活及びそれを支えた環境を知る事が出来るし、石材の岩石学的研究による交易圏の解明、更に絶対年代を知る熱残留磁気法・放射性炭素法・弗素テストなどいずれも自然科学の技術の応用によつてはじめて可能となるものである。結局、先史学の目的を確認しながら、出来るかぎり自然科学の技術を応用して行くことが望ましい。

北海道の考古学　千代　肇氏

北海道の考古学の話と言っても新入生の方には話が専門的になりますと解りにくいと思いますので、今日は北海道での考古学がどの様にして発展して来たかと言うことを話ってみたいと思います。

北海道の石器時代の遺物が初めて人々に注目されたのは寛政2年（1790年）に菅江真澄が北海道を旅行いたしましたが、元和9年菅江真澄が旅行する35年ほど前、津軽藩が蝦夷に対する警備を西津軽郡鰺ヶ沢村亀ヶ岡に計画しました。工事をしたところ土器が出土するので当時の考古家（集古家）の目にふれるようになったのですが、菅江真澄は根室から出土する土器と亀ヶ岡から出土する土器は同じもので、これはアイヌが使用したものだと言っています。寛政年間には村上島之丞は「蝦夷島奇観」に渡島国（北海道の南部）の当別から発見された土偶の図とかす勝の深山にいるアイヌは入墨をするのに黒曜石を使うなど書いています。アイヌ人が石器を使うと言うことは北海道を旅行した人達が木内石亭にアイヌが石鏃を使っていると知らせたものもあります。その後弘化2年の松浦武四郎の西蝦夷日誌や安政3年の大内餘庵の東蝦夷夜話などに土器石斧などの事を報告している。

明治になりますと9年に榎本武揚が小樽の手宮の古代文字を実見しそのことを報告しました。

11年には手宮の貝塚や附近から出土した遺物を開拓使博物課に納め、その資料を伊国地学協会に出品しています。9年の8月には当時東京大学の教授であつたジョン・ミルンが小樽の手宮を中心に初めて学術的な研究を行い、12年の7月にはアジア協会雑誌に"General Remarks upon the prehistoric Remains of Japan"を発表しました。当時はこの彫刻が北海道の考古学上の重要な問題でありましたので、このため日本考古学の基礎をつくりあげた坪井正五郎、エドワード・シルベスター・モールス、渡瀬庄三郎、森鴎外、鳥居龍蔵の諸氏が渡道したり報告を書いたりして北海道は有名になり、この影響によつて今日の考古学にいたったのであります。

同志社先史学会のありかた　石部正志氏

同志社先史学会は創立されてから満4年を経過したのであるが、今迄何をして来たかを幻燈で新入生の諸君に示すことにする。最初のものは昭和28年の島根県大社市字天根遺跡（縄文前期）のものであり、次は昭和30年の古代学研究会と提携して行った、宇治市八軒屋遺跡（土師）のもの、森君が発掘した昭年夏の南河内の陶器村のスクモ塚と、かまど塚のもの、熊本県川村の吉の尾古墳群のもの、最後は昭年末から本年にかけて行われた上賀茂本山の遺跡（弥生式末期から須恵器に亘るもの）である。今年は夏大学として北海道行を計画している。これらの活動を通じてわれわれは実質的に日本の学界に寄与することを期しているのである。経費或は人員の数等で多少劣るところはあつても、最上の学的水準に於て仕事を進めることを期している。指導者、先輩等の後につづいて、新人の間からも、続々優秀な熱心な研究者が生まれて来ることを切望して止まざる次第である。

番号	著者	書名	種類	月日	摘要
*785	田中口男	弥生式土器式様式 特殊文化の研究	単	昭31.3	
*788	文部省	学術用語集 (植物学)	〃	昭31.4	
*789	〃	〃 (動物学)	〃	昭29.3	

番号	著者	書名	種類	月日	摘要
790	鈴山	猛 環濠住居出土品	別刷	昭31.9	著者寄贈
791	〃	〃 2	〃	昭31.12	〃
792	玉谷	哲 岩和田を中心とした南関地方の石器	P.	昭32.5 発行	〃

※但し、雑―雑誌、P.―パンフレット、単―単行本、*校書野入)

掲示板

※5月18日、かねて坪田姉より連絡のあった滋賀県瀬田町東洋レーヨン瀬田工場内城山に存する淡水産貝類よりなる貝塚らしきものを、酒詰仲男教授・岡田茂弘・嶋瀬見栄・坪田嘉子氏らが調査した。又、同日、岡田・嶋瀬・坪田氏は同県守山町浮気の遺跡をも踏査した。詳細は次号に有にある。

※5月19・20日の頃、愛田直・岡田茂弘兄は京都府竹野郡網野町小字宮ノ下遺跡を予察した。同遺跡は砂丘下に埋没した縄文早期から前期にかけての包含地遺跡であり、6月21日より発掘する予定。

※5月26日、安井良三兄は京都学芸大学小江慶雄氏と共に、滋賀県高島郡新旭町朽原敷台上遺跡を踏査した。同遺跡より弥生式土器、磨製石斧・模造石剣・須恵器・土師器・奈良時代の瓦などが出土している。

※5月28日、同志社大学同工館内考古学実習室に於て、本年度第2回先史学会例会が行われた。演題及び演者は以下の通り。

安井良三「亀岡市池尻坊主塚古墳発掘報告」

岡田茂弘「大阪四天王寺址発掘に参加して」

※5月24日・同31日の両日、考古学実習の授業の一部として、御土居の現状調査を行った。因みに御土居は豊臣秀吉の命により、京都の境界線としてきづかれたもの。

池谷和三兄は、約一週間の予定で卒業論文資料収集のため上京していたが、5月28日帰学された。

※6月2日、石部正志・岡田茂弘・坪田嘉子の三氏は、かねて本学柿本北呂美姉より連絡のあった三重県阿山郡春日村壺山山頂巻見の経塚を踏査された。なお、詳略な調査経過は、本紙3頁にあり。

※本年4月より宮崎博物館に赴任された鈴木重治兄は、所用上京の帰途、6月7日本学に立ちよられた。なお兄は宮崎で精々の発掘調査を行っている由。

※5月10日より6月9日迄に、研究室へ来訪者は次の如くである。

田中啓・佐々倉・青葉秀松・海老沢小枝・細川富美子・鈴木重治・芝氏。

※本紙も漸く第3号を出す事となりました。今の所は相当に不満足な点も色々ありますが、次のmonthly に出す線を崩さずに、少しづつでもよくして行きたいと思っておりますから、今後忌憚なき協力を御願い致します。雑報とか資料紹介・近況などお知らせ下さい。

編集者　岡田茂弘
昭和32年6月10日　発行
発行所　京都市上京区烏丸今出川東入ル
同志社大学 先史学会

実習室だより
第3号
1957年6月10日発行
同志社大学先史学会

神奈川県相模川支流の一横穴古墳

酒詰　仲男

国大考古学会の報「若木考古」43号、P.P.2～3（昭和31年11月）に、佐藤善一氏による横浜市元石川下谷横穴古墳の報告が載っているのを見て、予も昭和24年に、これによく似たものを、相模川地方で実査したのを思い出し、その時の旧記と小板重氏の実測図とを引っ張り出した。

これがあるのは厚木市の北約4粁のところで、高座郡依知村大字中依知字古賀にある。旧記の方には、余り詳記されていないので、おぼろげな記憶を辿って記すことにする。調査に赴いたのは同年の7月27日のことで、同行者は鈴木尚博士と、小板重氏と予の三人だけであった。確かこゝに人骨を出す横穴古墳のあることを、小板氏の伝聞で知り、三人で出かけたものと記憶する。この地点は相模川と言っても、その本流に直面せず、厚木市でこれと合流するその一支中津川に座するものであった。この両方の川にはさまれた低平な一つの台地で、今市の北方に続いており、且々たる八王寺街道が、その上を北上している。この道を暫く進み、金田の部落をすぎ、一寺を左に見て中依知の地内に入ったのである。こゝで街道を離れて左折し、畑を通り抜けて行くと中津川の断崖に出る。この横穴は崖に掘られたものであった。

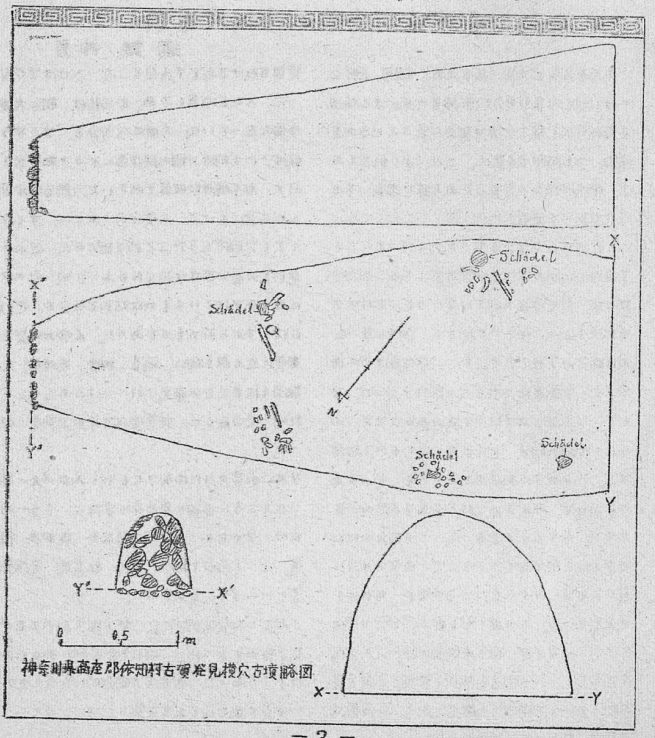
夏草をわけて探してみたところ、入口はすぐ解った。入口を閉塞してあった石材は、既に大部分崩れ去っていた。人骨の大部分も、そこから物好きにも附近の畑の耕作者によって取り出されて、別の場所に収容されていた。然し鈴木博士の精査によって、人骨は図の如くに、少くとも2個体あったことが確認された。様から見た先の骨の保存は頗良好であったが、穴の中に取り残されているものは極めて不良で、さわればくずれる程のものであった。人骨の位置は奥壁に近く南を枕に、頭蓋、四肢骨、尾椎骨、大腿骨及指骨などが発見され、これのあるのと反対側の壁の近くに、頭蓋骨の破片が2個見つかった。

なおこれ等の外に中央よりもやゝ入口の方へ寄ったところに長軸と垂直角の方向に、もう一個体分の骨があり、これには頭蓋骨、肩甲骨、鎖骨、すこし離れて腓骨、脛骨、膝蓋骨、足指骨等がばらばらに発見された。

これ等の人骨の周辺には、やゝ大きめの玉石が敷き詰めてあった。これは全面的にあるもののようであった。副葬品を全面的に捜索したが、一つ石を起こして土まで篩った訳ではなく、

遂に何物も発見し得なかった。午后2時頃立に、鈴木博士は骨の整理を終り、われわれは穴の裏側を掘った。その時出来たものが附図の如きものである。図に記載されていないが、判然り記憶していることは、壁から天井へかけて、紙鉛の刃痕が美く心く描って残っていたことである。平面及断面の形状、元石川の佐藤側と実によく似ている。ただやい細いだけである。

この地域には、すぐ附近になお二三の古墳らしきものがあると言うので、土地の人の案内で歩いて見たが、何とも等の発見が甚だしく、余り判然りしないので中止した。この人骨は、成るべく得るものは発掘室に収め、常に取り上げた分も摸鉛して、ルックに入れて人類学教室に持ち帰ったので、同教室のどこかに保存されている筈である。（昭32.8.5）



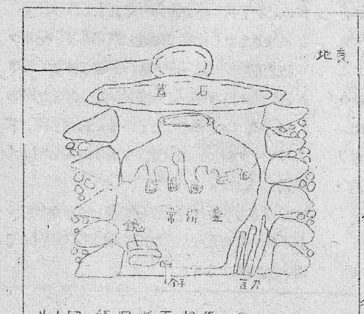
神奈川県高座郡依知村古墳発見横穴古墳略図

三重県霊山発見経塚の踏査

坪田嘉子

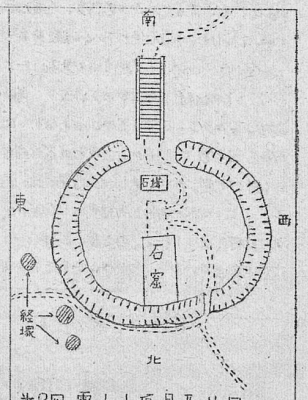
5月中旬に本学文化史専攻の4回生栃本比呂美氏が数点の遺物を実習室へ持参された。栃本比呂美氏の話によれば、数年前伊賀市柏の霊山頂にテレビ中継所を建設した際工事により出土したものとのことで、遺物の中には銅鏡・景徳鎮と思われる合子・柱のかけた瓶類の破片・鉄剣の破片や直刀片等があった。これ等遺物は公土地等や出土状態から考えて経塚からの出土物と思われた。それ故、早急の調査を必要としたので、本年6月2日（日）、石崎正志、岡田茂弘、等吾の三人がその調査を行った。

当日、まず近鉄線柏駅を降りて約70分の道程にある柏本部へ栃本氏の案内で伺い、挨拶を交わし、霊山について種々お話をうかがった後、さらに柏本氏の案内で霊山を訪れた。同氏は柏町の文化委員であり、霊山山頂で遺物が発見された当時、実地調査を行い、当時の状態を詳しく記録してあかれていた。村主氏の話によると「三重県阿山郡島ヶ原村（旧西柏瀬村）大字下柏瀬地内の霊山山頂テレビ中継所の鉄塔の建設は昭和27年に行われ、塔工台の建設に巨石を必要としたため、附近を試掘して石を採取するとこれを発見した所、その石を取除くとその下には直径約3尺の七ットがあり、その周囲に礫を積み、それの真ん中央に弥勒菩薩の画を収め、壺の周囲に鏡と直刀とを収蔵した遺構が存在した。（図1）この柏の形式の遺構は他に隣接してもう数箇所あり合計3箇所に差て発見された理由である。テレビ中継所の工事を続行に行かれた村主氏等が工場現場に駆け合わせ、「これは大変だ」と用中で出土品を採集し、持ち帰り中にとのことであった。現在その弥勒菩薩の経壺3個



第1図 経塚断面想像図

第1図・第2図は村主種二郎氏が経塚発見当時関係者より状況を聴取して作成されたもの。



第2図 霊山山頂見取り図

村主氏宅に保存されており、3個とも破損しているが復元は可能である。そのうち1は高さ530mm、口縁部直径244mm、胴部直径372mmで緑色の釉が口縁部より底部にかけてかかっており、底部にはモミの圧痕が認められた。2は高さ308mm、口縁部直径180mm、胴部直径264mmでこれも又緑色の釉が口縁部より底部にかかっている。3は破片が小さくその場では原形を推定出来なかった。その他に灰色を呈する須恵の破片及び他の土器の破片が多量ではられた。直ちに実測図と写真を撮らしていただき、午後、村主氏の案内で柿本氏を含めた5人は重山へ登った。頂上への道は三本あり、私達は比較的ひびらかな道を登って行き約2時間ののち頂上に達した。頂上ではネニ図の如く石手にテレビ中継所が見え、左には観音の祭ってある石室がみえる。その石室と石塔の周りには明らかに人工的に積み上げたとおもわれる土塁がぐるっとめぐっており、石塔の南の土塁のはれ目からは石段が下へ約20程あった。この経塚の存在地点は丁度視達が重り合いたところにあり、ケ所略測出来た小草が生い茂り、遺跡の詳細なるプランを確認する事は出来なかった。小塔を囲っていた積石の石と思われる花崗岩の石片が採集された。更に私達は裏参道の近くで、華い瓦器の破片と赤褐色の土師器片約20片程を採集した。この瓦器と同種のものは柿本姉が実習室へ寄贈された中にも含まれていた。又、山頂から見おろした風景は木津川の蛇行して流れた平野が広がってなかなかおもしろい地形で大きな公園の如くであった。私達は帰りは南側の私道の石段を通って下山したが石段を下りきった所はまるで[illegible]の庭の様な良い所だったので村主さんに「これは何ですか」と尋ねると、ここは現在は中腹にある重山寺の伽藍が創建の伊賀路めぐりで消失する迄あった位置であって、石段上の観音の石室のある平坦面は多分奥の院であろうとのことであった。なお、今の重山寺の住職は重山経塚の遺物の存在を所持されているとのことなので下山の途中訪問した。そこでは和鏡3面、刀剣2本、合子の身が保存されていた。和鏡は破損が甚しく直径82mmのものと78mmの松喰鶴唐草鏡と云われていた99mmの薄肉双海鏡とである。白磁合子は直径75mmで景德鎮窯のものと思われた。直刀は291mmと331mmの長さのもの2本であったが腐蝕の度が甚しかった。当経塚で発掘した鏡は和鏡6面であり、そのうち私達が調査のは4面で他の2面は伊賀上野市の黄梁秀夫氏が所持され残り一面は伊賀上野市の図書館にあるとのことである。空が多少暗くなる頃、下山して柿本駅、午后8時発の汽車で帰路についた。

末筆ながら今度の調査の際に種々御世話になった柿本御一家の方々、及び村主様一部代にわたって深く感謝致します。

瀬田町東洋レーヨン内遺跡見学記

嶋瀬見衆

過日、東洋レーヨン瀬田工場内に貝塚があるらしいことを知ったので、須藤教授、岡田茂弘、坪田嘉子、筆者の四名は、5月18日瀬田に出掛の目標をたてた。

土曜日の午后、工場は青空は空気に満ちていた。私達は先ず、PRのパンフレットによって東洋レーヨンの概容を認識したわけである。一寸とまどい、そして嬉しく思ったことは、工場側が協力好意をもって私達を迎えてくれたことである。工場側に当エ[illegible]の一部が増築された時、出土したという遺物が保存されていた。提瓶・壺・須恵器の壺・鍔・提鉢等であり、私達は実測し撮影することが出来た。さて愈々早務[illegible]の案内で私達は現山の一隅に存する[illegible]よい環境からと云うのが工場のモットーの由で、行く道すがら各種の樹と手入のゆきとどいた庭が私達の眼を楽しませてくれた。小高い丘、こんもり茂った緑、新緑の青さ、瀬田の流れなど誠に結構な景色である。この丘はその昔、佐々木氏の支城であったとの由でそれを語る記念碑が丘上に建てられていた。丘の端、土が切り取られて崖の様になった所に貝殻が露出していた。地表から貝殻上面迄約1m、貝殻の厚さ約1m、5mで東の方にかなり傾斜していた。しかしながら貝殻はかりでその他の遺物は遂に一つも見出せなかった。ただ、ごく小さな遺構した数個採集。内部黒色を呈する土器小片が一個表面採集された。しかしこの貝殻中に存在したのかどうかは疑問であり、これのみで貝塚と断定することは出来ないが、幼貝ではなく、閉じた貝もほとんど無い位で、自然に堆積したとも考えられない。恐らく貝塚であろうと思われる。[illegible]かもしくはごく新しい貝塚と考えられるが、周囲の地形等調査ではいずれとも定め難く、年は出来ない。貝の種類は、セタシジミ、トンカリサザエ、ハ、イケチョウガイ、マツカサガイ、ヒドリガイ等。石山貝塚のそれとほとんど酷似しているが、明瞭に違っている点は石山貝塚にはしてシジミが非常に小さくかつ他の種類に比して小さいことである。結局、私達は貝塚であると断定することは出来なかった。だが本格的に調査されれば、何かを掴み得る筈である。私達は日を改めて調査する事を誓って帰路についた。その後、土手で布目瓦一個を採集した。丘に寺院でも建立されていたのであろうか、又、どうして立金体を解する事が許されたなら興味ある結果が得られるであろうなどと話合った。

瀬田を訪れた私達は、更に帰山町の[illegible]遺跡をのぼすことにした。五月初め頃、瀬田新市街電鉄に導水で工事中、土器が出土したと記載されていた。帰山駅の近くの[illegible]は工事場が指す地点だった。ここで布目瓦、土師器片、新しい須恵器片、瓦塔、青磁片と思われるもの等を採集した。

この日、私達は予期した成果をあげることは出来なかったけれども、比較的満会になと思いつつ帰路についたのである。

第二号正誤表

P.3－16行目「[illegible]が発掘したは、鹿・石部・福田・宇田川・武田君らが東大津高校建[illegible]部員らと発掘した」に訂正。

P.3－17行目「スクモ塚とは、[illegible]塚」に訂正。

P.3－18行目「川村の古ノ屋古墳群」は「[illegible]村の古ノ屋古墳群」に訂正。

P.3－20行目「（弥生式末期から[illegible]に亘るものうは、（平安時代前期の[illegible]位）に訂正。

（オ二回例会から）

亀岡市池尻坊主塚古墳発掘報告

安井良三

・坊主塚古墳は京都府亀岡市馬路町字池尻の田園の中にある上円下方墳である。大正年間、梅原博士が踏査されたのであるが、戦后、耕地整理が行われ、封土の破壊が甚だしく、ここに亀岡市史編纂委員会は梅原博士の指導によって、[illegible]す前の坊主塚を昭和31年発掘調査することとし、報告書は近く刊行される予定であるが、今回の[illegible]よって判明したことを記すと以下の通りである。

（1）．外形は一辺36m余り、高さ6mの上円下方墳であること。葺石は全面に認められた。

（2）．内部構造に於いて、古墳の本来的な意味に於ける主体部構造（石室、粘土槨等）は全く認められず、従って[illegible]されていたこと。

（3）．出土遺物としては、仿製鏡1面、短甲1、肩鎧1、鍬付冑1、鉄鏃1把、鐔1、直刀4、剣などがある。

× × × ×

大阪四天王寺跡発掘に参加して

岡田茂弘

四天王寺は現在、大阪市天王寺区[illegible]所謂四天王寺式の伽藍配置を持つ寺として著名であるが、A.D593年に創建されて以来数多くの火災破壊にあい、近くは1945年の空襲によって全焼している。そのため、この機会に同寺の徹底的な発掘調査が、1955年以来文部省文化財保護委員会及び大阪府教育委員会の共催によって行われているが、本年も4月10日より5月16日にかけて調査が行われた。同寺の調査は未だ完了しているわけではなく、又、中間報告、正式報告等はいずれ文化財保護委員会の手により出されると思うので、私の参加を許された今年度調査の概略を述べるに留める。今回判明した事は以下の如くである。

（1）．従来、完全に破壊されていると思われた中門からは、土壇周囲の周溝の存在によって、[illegible]と考えられる土壇の規模が判明したこと。少なくとも[illegible]（恐らく創建当時も同様）は正面3間、側面2間の門であり、天慶再建時に正面5間、側面[illegible]になったと思われること。慶長以后の盛土中より、東に対称の位置に切断された人骨が出土したこと。

（2）　塔周囲に於いては飛鳥時代の地表面が確認され、塔と中門を結ぶ奈良時代の瓦敷参道が確認されたこと。

（3）　金堂においては、基壇下部より掘込み土壇及びそれと同一工程と考えられる柱間3間、2間の台石が出土したこと。

（4）　講堂では、奈良前期の土壇及び地覆石、更に北側に於いて、同時期の屋根の一部と共に落ちた瓦の堆積を発見、その下より扇垂木及び釣金具に装着されたままの風鐸が出土したこと。

— 6 —

3号－6

新収書目

番号	著者	書目	種類	月日	摘要
770	（[illegible]）	成田史談3	雑	昭32.3	江原正義寄贈
674	（函館海洋生物学研究会）	海洋生物研究会々報	〃	昭31.8	博物館協会
675	平井尚志	南露出土ガラス碗について	別刷	昭32.4	著者寄贈
680		武相文化94	P	〃	石野瑛寄贈
◎685		Man	雑	昭31.12	
687	木村英一	中国古代思想における権勢と祈りについて	単	昭31.2	同志社東方文化講座
688		石器時代4	雑	昭32.3	
◎691		London News	〃	昭32.2	
694	（立命館大学考古学会）	上代文化27	〃	昭32.4	
695	[illegible]	[illegible]	P	昭32.1	著者寄贈
696	東正雄	土佐沖ノ島貝塚相について	P	〃	〃
698	（信州ローム研究会）	信州ローム2	雑	昭32.4	藤沢宗平寄贈
699		瀬戸内考古学1	〃	昭32.2	
701	酒詰仲男 岡田茂弘	千葉県更和下北原遺跡発掘略報	P	昭32.3	著者寄贈
702	（学習院高等科史学部）	やじり2	雑	昭32.2	岡田茂弘寄贈
703		日本大学考古学通信4	P	〃	平井尚志寄贈
706	高瀬重雄	高岡市五道横穴古墳群調査報告	単	昭32.3	林太門寄贈
707	（日本人類学会）	人類学雑誌65-2	雑	昭32.2	
708	（〃）	〃65-3	〃	昭32.3	
709		貝塚63	P	〃	
711	釧路博物館	博物館新聞63	P	〃	片岡新助寄贈
712	奈良県文化財委員会	珠城山古墳	単	〃	小島俊次寄贈
713	滝沢泉平	弥生式文化より古墳文化への推移について	別刷	〃	著者寄贈
714	奈良県教育委員会	奈良県史跡名勝天然記念物抄録9	単	昭31.12	小島俊次寄贈
◎715	日本博物館協会	博物館研究2	雑		
717	松浦史料博物館	全館パンフレット	P	昭32.3	日本博物館協会寄贈
718	仙台博物館同好研究会	全会 〃	P.	〃	〃
◎721	長広敏雄	帯鉤の研究	単	昭18.9.	
◎722	中山英司	入海貝塚	単	昭30.12	
725	国学院考古学会	若木考古	P	昭32.3	
726	Maringer	Einige faustkeilartige Geräte von Gongenyama und die Frage des japanischen Paläolithikum		昭31	著者寄贈
729	立教史学研究会	瑞穂V	雑	昭32.3	平井尚志寄贈
731	天野宏	Experimental analises of limb development	P	昭31	著者寄贈
732	日本考古学会	考古学雑誌42-2	雑	昭32.2	
735	日本考古学協会	日本考古学年報4（26年度）	単	昭32.4	
736	文化財保護委員会	支登支石墓群	〃	昭31.7	
◎754	Sonia Cole	The Prehistory of East Africa	単	昭31	
◎755	R. Ghirshman	Iran	単	〃	
◎756	W.G. De Burgh	The legacy of the Ancient World I	〃		
◎757	駒井和愛	中国古鏡の研究	単	昭31.7	
◎758	レナード・ウーリィ 赤木俊訳	考古学より観たるアジア	単	昭17.11	
◎759	Ralph Buchsbaum	Animals without Back bone I	〃	昭31	
◎761	Sir M. Wheeler	Archaeology from the Earth	〃		
◎762	東洋協会	東洋協会調査部学術報告オ1冊	単	?	
763	文部省社会教育課	社会教育調査（昭30年度）	単	昭32.3	著者寄贈
764	〃	社会教育施設関係調査統計表（昭30年度）	〃	〃	〃
765	[illegible]観光局	観光資源要覧4	〃	〃	〃
767	文部省社会教育課	社会教育調査報告（昭30年度）		昭32.4	〃
769	京都学芸大学	史想5	雑	昭31.12	[illegible]寄贈
770	〃	〃6	〃	昭32.3	〃
771	古代学会	古代学会1-2	〃	昭27.3	〃
772	〃	〃1-4	〃	昭27.9	〃
773	〃	〃2-1	〃	昭27.12	〃
774	〃	〃2-2	〃	昭28.3	〃
775	〃	2-3	〃	昭28.6	〃
776		武相文化95	P.	昭32.5	石野瑛寄贈
777	斎藤彦松	斎藤彦松論文一括	〃	（昭32.5）	著者寄贈
781		私たちの考古学12	雑	昭32.3	
783		貝塚64	P.	昭32.4	
◎785	京都帝国大学文科大学考古学教室	京都帝国大学文科大学報告2（大阪府河内国府遺跡）	単	大.7.7	
◎786	三木茂	メタセコイア	単	昭30.6.	

— 7 —

3号－7

実習室だより

第7号　1957年10月20日

青森県最花貝塚発掘断章

酒詰仲男

1　はしがき

青森県最花貝塚は昭和21年土地の人びとによって発見され、続行われたが、翌年八幡一郎、中島孝雄氏等によって、本格的な調査がされた。

昭和26年、県当局の依頼によって、下北半島の綜合調査が行われるに際し、われわれ人類学班は、本遺跡から人骨が嘗て出たことを聞き及んでいたので、これを発掘することとした。

これに参加したのは鈴木尚助教授、大学院学生埴原和郎、春原[illegible]（以上いずれも当時）、北沢八重雄補手及予であるが、加藤松平義人、中島全二、笹津備洋、橋善光、佐々木宗、秋浜の諸氏の援助も得た。綜合調査に参加した、外の分野の諸[illegible]も、いろいろお世話になった。本稿を草するに当って、上人びとに、深甚なる謝意を表する。

2　発掘経過

月4日　前日、埴原和郎君と当地に来着した予は、本日助教授、北沢八重雄氏等を迎え、最花遺跡の予察に赴いた。

月5日　本日から人夫を雇い、本格的に発掘を開始した。四方の2区劃を設け、両区を同時に掘りはじめたが、貝層部分的にしか認められなかった。

月6日　続掘。焼けた石、灰層、サルボウの部分的な純貝

層等を発見。一区の方は平均1米の深さまで掘った。

8月7日　続掘。最下層迄掘った部分もあるが、人骨は出ない。

8月8日　今日迄掘ったところをa地点と名付ける。a地点から人骨が発見されないので、八幡一郎氏等が先年発掘した東へ寄った畑を掘ることに決定。農作物の関係で、旧発掘区の南側道路を掘ることとした。b地点と名付ける。a地点第2区からは、自然石で囲んだ炉が発見された。

8月9日　a地点の方、第3区を設け、それを掘る。炭らしいものが出て来たが、一部分だけだった。b地点の方から、遂に人骨を発見したが、保存は不良であった。

8月10日　a地点の方発掘終了。b地点の人骨は側臥屈葬と仰臥伸展葬の二体であることがわかった。b地点の方で、骨をあげたのち、直ちに埋めはじめた。今日午前中に発掘品を田名部、常念寺へ運搬。予は夕刻遺跡全体の歩測を行った。

3　遺跡

最花貝塚は、青森県下北郡東通村大字最花にある（以下省略）

4　自然遺物

a）貝類　Mollusca

イ）腹足類　Gastropoda　1. ホソウミニナ　2. ツメタガイ　3. アカニシ　4. バイ　5. マイマイ類

ロ）斧足類　Pelecypoda　6. サルボウ　7. ホタテガイ　8. イタボガキ（丸のあるもの）　9. カキ　10. ニホンシジミ　11. マシジミ　12. カラスガイ　13. ハマグリ　14. カガミガイ　15. アサリ　16. ウバガイ　17. バカガイ　18. サラガイ

b）獣類　Mammalia

7号－1

7号－2

一般に大きい動物の骨の方が、小さい破片になっている。
[illegible]食用に供したものである。

1. サル、下顎、相当大きい、完成したものである。2. スギ、下顎骨。3. アナグマ、下顎骨、4. ウサギ、5. イカ、6. イヌ、下顎骨破片、足骨、脊椎骨等相当に多い。7. マ、上顎骨破片2ケ、第2区(a地点)貝層内より出土、なおこに関する骨が他に二、三あるようである。8. イノシシ、カに比して非常にすくない。下顎は成獣2頭分(a地点第1、第2区)出土)と、仔獣1頭分の破片(a地点第1区)があるのみである。9. シカ、すくなくとも10頭分。角角の大なるもの二。うち1本はa地点第2区の炉辺にあった。その他角の小破、不思議に頭骨の破片少くなく、下顎は殆んどすべて、小さく破れていて、20数片ある。肩胛骨も、上端関節部の破片のみも10数ケを算える。脊椎骨も、長いまゝのもの、小破片等多あり、上膊骨、距骨、跟骨、指骨等も多い。10. クジラ、助及肢骨。

c) 爬虫類 Reptilia

1) ウミガメ類 指骨数個出土。

d) 鳥類 Aves

1) ハクチョウ 上膊骨の破片数個出土。2) カモメ? 膊骨、3) カモ?

e) 魚類 Pisces

1) スズキ 2) カレイ類 3) マグロ wirbel 8個以上。地点第2区より、続いて発見した。4) ニク類、歯板1個

f) その他

灰、木炭、岩石類、やけたる太など。

5 人工遺物

a) 石製品

石製品には、磨り石、石弾様石器、槌石、小楕円棒状の石、石棒状の石、礫状の石、礫器、製器、粘板岩片、打製石斧、石鏃、石匙、鴨脚型石器、石棒、磨製石斧、異形石器等があった。その主なるものについて記るすと以下の如くである。

イ) 磨製石斧

石は大部分が、深緑色を呈している。半欠品のみ6個で全器形は不明であるが、胴に比して刃部に及ぶ程、細く薄くなり、太い中央部の断面は、楕円形である。多分磨り截りもある。概して普通の磨製石斧は深く、磨り截りは浅く発見された。その中の一個で、磨製石斧を、磨りものに利用したかと思われるものもある。やゝ完全なるもののうちの1個は、肉の薄い、丸棒状石斧形のもので、a地点第Ⅱ区出土品である。幾分反りがあり、刃部の中央太く、一部に不規則な凹み残されている。今一つは長さ8cm程の、肉の薄い、頁岩製のもので、a地点第Ⅱ区出土品。刃は非相称的で、一方がのび出している。欠品のうちには、左右相称のものもある。今1個は、茎の部分の破片である。これ等の外に、長さ4cmばかりの、小磨製石斧が1個ある。刃部が欠損している。a地点第Ⅱ区の貝層上部から出土したものである。

ロ) 打製石斧

一面は関東地方に見られる如き自然面のまゝの、短冊型打製石斧で、同類のものが2個ある。1個は打ち欠いた方の側の肉が、盛れ上がっているが、今1個の方は薄く、半欠品である。前者はa地点の掘げ土から発見されたもの、後者はb地点の出土品である。

ハ) 礫器

7号—3

7号—4

礫器と言っても、関東地方の縄文前期等に多く見られる、自然石の一端を打ち欠いただけのものではない。原石を大きく打ち欠き、retouché を入れたものが多い。ただその中で、形のやゝ調ったものと、然らざる破片とがある。硅岩、硬砂岩、燒石等各種の石質のものがある。形が整っていると言っても、從来の石器のどの形かに属するものとは言い難い。こうした石屑とも言うべきものは、東北地方の遺跡の特産物の一つとも言えよう。採集したもの全部で約30片、一般のものは約130片もある。

ニ) 瓢状石器

長二等辺三角形に近いもので、燒石製と、硅岩製のものとがある。

ホ) 石鏃

有柄のものが4個ある。全部有柄で、うち2個は肉が厚い。1個は黒曜石製。1個は硅岩製。他の2個は凝灰岩製である。

ヘ) 石槍

全部で5個ある。うち2個は無柄で、5cm以上あり、有柄のものは3個で、3cm前後である。前、後者共黒曜石製が1個ずつあり、大きい方の他の1個は硬砂岩製、小さい方の2個は、凝灰岩製である。

ト) 石匕

長径2.3至5cm程。小型。楕円形、黒曜石製のもの1個と、所謂 Woman's knife とよばれる、刃先の尖った、長さ5cmばかりの硅岩製のものとがある。

チ) 槌石

扁平な円形の石で、側面が多少磨滅しているもの。

或は打痕のあるものが2個ある。打石斧の断片の如きものが8、楕円形で、長軸の一端に打痕のあるもの8。石皿の上などで、物を打ち砕くのに使用されたかと思われる。

リ) 砥石

砂岩製の断片であるが、表裏2面に顕著な平たい窩り跡がある。今1個は花崗岩で、石臼下の如き形のものであったろうが、その半欠品である。一面は磨き、反対の面は打ち欠きになっている。又は横につけられていて、横断面は三角形で鋭い。この外楕円形の軽石や、その破片が多く発見された。多分これ等も砥石に用いられたものであろう。

ヌ) 石棒

砂岩製の無頭、細形の石棒の破片と思われる。A地点第II区、貝層下の出土品である。石棒とも断じ難いが、細長い石は非常に多く存した。

ル) 異形石器

一面は平、一面は中央に陵があって、尖端部は一方に偏して尖っている。中央の破砕部にも磨いたあとがあり、独鈷石様石器の半欠品かと思われる。

ヲ) 石皿

安山岩製。長めの楕円形のもの。A地点の第I区及第II区の貝層中から発見された。と言うのは断片として發掘されたものを継ぎあわして、全形を推すことが出来るほどになったのである。脚はない。この外に平面に多少打痕のあるようなものが2個ある。

ワ) 窩り石

円形の様なる石質の窩り石が9個ある。長い棒状で、一端を窩いたもの2個。完全に採集したら、發掘品だけでも、20個

7号—5

7号—6

以上あったと思われる。

カ) 石弾形石器

ラグビーの球のような形をした、よく磨った所謂石弾形石器が2個ある。これ程明らかに加工はされていないが、丁度握りこうの石が2個ある。或は粗製の石弾か。

ヨ) 平石

これは自然石であろう。然し捨てかねて採集したもの30個に達する。土器の台に使用されたものではなかろうか。

B) 貝製品

イタボガキ製の貝斧1個。a地点第1区貝層中より出土。

C) 骨角器 } 省略
D) 土製品 }

(以上備忘録として記録して置く、図省略)

掲示板

10月4日　今日から芦花展の準備を開始。10月7日から10日に亘り、東京芦花恒春園に、千代、石部両君と、酒詰は、芦花の遺品をとりに行き、10月12日(土)と、13日(日)の両日に亘り、展覧会を、啓真館二階で開催。盛会であった。続いて、10月15日から17日に亘って、全遺品を返却に行き、帰宅した。芦花はクリスト教を基調とした、明治中葉の積極的な社会の reformer として、近頃再評價されつゝあるものらしい。

10月15日頃から月末まで、岡田茂弘君は、文部省文化財主催の、天王寺陵発掘を手伝った。

10月中　酒詰は、堆積した実習室の遺物の再整理に努力した。然しまだ仲々完了しない。

10月24日夜　和歌山県稲原の巽三郎氏と、田辺市の羯磨正信氏とが、酒詰の私宅を訪問。日高川から出た、旧石器らしきものを持参したので、案内の宇佐晋一氏をも交えて、千代、石部君、岡田茂弘君と実見した。石質は flint であるが、外面は風ランしていて、割り口でないとわからない。もの

はいずれも三角柱状であるが、始ら一条細くはぎ、四角柱となっている。両端は同じ方向へ70～80°傾斜している。数個持参されたが、いずれも同じ手法のものである。ブレードの一種と見られる。それ等は昭和27年の台風で、日高川の河成段丘が破壊されたが、そこから発見されたのだと言う。表面から又米以上も深い礫層の上の粘土層から出土した。残念ながらその部分は、現在築堤の基礎となっていて、再発掘は不可能だと言う。

◇酒詰は本学期に修士課程で引き続き東北地方の貝塚について講じ、博士課程の方では "Prehistoric Europe" の輪読をしている。

10月29日　翌日から奈良で開らかれる秋の考古学協会総会の研究発表準備の為、宮崎博物館の鈴木重治君が入洛した。

仝日　仝会出席のため、和島誠一君、酒詰宅に来泊。ユネスコ勧告案をめぐる、考古学的発掘許可制の問題について談話した。

10月30日　考古学協会総会第1日。午前中文化財研究所に於て、総会を開き、評議員の報告、その他各報告を聞いたが、その後ユネスコ勧告案の問題で、再討議を行った。

その結果、われわれの得たことは、酒詰が屢々「一壺(甕は誤)の値」として記述したごとき結論であった。

◇　10月末福岡で開催された第12回日本人類学会、日本民族学協会連合大会で、酒詰は森浩一氏と、今夏の北海道踏査の発掘について許可の答であったが、両人とも義務の都合で出席出来なかった。

◇考古学談話会の発表は次の通りであった。

10月5日
研究発表　石部正志「墳の立地と外形」
読書解題　平野芳加「蛇塚」

10月12日
研究発表　岡田茂弘「文化概観」：池谷和「須恵器研究史」
読書解題　石附喜三「芹沢長介著《無土器文化》」

10月27日
読書解題　宮森正勝「坂輝弥《縄文文化》」；坪井嘉子「奈良紀要《桑城山古墳》」

(以上酒詰)

昭和32年11月1日発行
京都上京区今出川御門内
同志社大学文学部内
同志社先史学會
責任者　酒詰仲男

実習室だより

1958・2

同志社 大学 考史学会

文化財保護について

酒詰仲男

以下に記すものは、同志社大学考史学会の談話会で語り合ったことである。私の個人名を出したが、そう言う意味で読んで頂き度い。

1 水野清一氏は最近朝日新聞紙上に、支那でやっている「緊急工作隊」について書いた。全く破壊されようとする遺跡、或は正に破壊されつゝある遺跡については、日本に於ても、中共と同じような「緊急工作小組」を作る必要があると言うのである。研究室と、適当な研究員のいる各大学では、必ず「緊急工作班」を組織して置くこと。そして 110105 の入り次第、直ちに現地へ赴いて調査する。その経費は各都道府県の教育委員会が負担することを原則とする。然し実際はそれを頼っても駄目だ。時間的にも間に合わないし、金の方もあてには出来ない。まず出来れば各大学で平常から若干の費用をプールしておいて、一応立替え払いの形で支出することにする。この為には、或は考古学界全体でその為の資金のカンパをやってしまえ。先ず隗よりはじめよと。同志社大学考史学会で、こうした組織を作ることを試みてみてはどうであろう。この班に限って、例の居坐制の枠を特に考慮して貰う必要もあるし。実際に動くとなったら、なおいろいろ研究すべき問題もあろう。然し部ぐ国立大学よりも、同志社のような私立大学の方がやり易い面もあることは事実である。

2. 文化財を護る運動は、あらゆる機会を捕えて気長にやる必要がある。その為には、今の小学校、中学校生あたりから、文化財の大切なことを、ボツボツ教えて行くことである。本年3月、京都府浜詰遺跡

を発掘出来たのも、先年夏われわれが細野町宮下遺跡を掘りに行った時に、橋中学の人達に、遺跡遺物について語った結果であった。その時縄文土器を見て帰った一人の生徒が、偶い浜詰地内の畑で弥生をほっているところを通りかゝり、そこから土器片が出ているのを先生に告げたことがそのはじまりであった。この遺跡は土工車の為に大半破壊されることになったのであるが、幸、その前に遺跡であることが解ったので、町の有志に話をして破壊前にわれわれの手でそれを掘ることが出来たのである。この地方には中矢徳治という熱心な好事家が一人おられる丈で、一般の人々考古学に対する関心は極めて低く、皆無と言ってもよい程であった。その中矢氏が先ず宮下遺跡の調査にわれわれを誘い、われわれがその土地で啓蒙運動をやって来たために、小、中、高校生の間に、今では考古学に対する関心が大いに高まっている。夕方になると村の子供達が、合宿所の附近へ遊びに来て、大いにわれわれと親しみ度い様子を示すことは、誰でもよく経験されることと思う。そうした時に、無為無業に過ごすのでなく、何か特別のスライドとプロジェクターくらい用意して行って、手の空いているときが、大いに小、中学生に文化財のピーアールをすればよいのである。ただわれわれが昨年北海道へ行った時には、大人用のものしか用意して行かないために困った経験がある。こどもやさしい初歩の考古学について語るようなスライドを用意して行くとよい。こうした仕事を各大学の、地方の調査に行く人達に対して一つのオブリゲーションとすればよい。成程古代の遺物という テーマがあっても今の生徒達は、一次、先生からそうした話はきくのであるが、単なる知識として覚えている先生から、そんな話をきくのと、われわれ体験をもっている者から説明をきくのとでは全く異る。故に作業に大きな支障の生じない範囲に於て、是非これを自らやり、又各大学にもやって貰うのがよい。

3 考古学者自身の側にも反省すべき点があるのではなかろうか。現在遺跡の発掘は一次居坐制であって、自分等の好き勝手な遺跡を勝手に掘ることが出来る。その選択をする時に、この遺跡は最近こわされそうか、或は相当長い間保存されそうか、そんなことは一向に頓着されない。何でも面白そうな遺跡を、片っぱしから掘りまくるのである。そしてその報告は仲々書かない。殊に練習の為に大事な遺跡を掘って見ると言った試みさえある。こんな場合は、どこでも、こわれかけたつまらぬ遺跡を扱うべきである。何よりも破壊されそうな、或は破壊されつゝある遺跡が、どの方面にも沢山あるのであるから、多少研究の方針を捨てても、或は多少

つまらぬ遺跡のように思われても、功名一本にかられることなく、そうした文化財を護るための発掘も大いに考慮して欲しいものである。

4　ジャーナリズムと考古学の結びつき方にも注意して見る必要がある。新聞が考古学の記事を好んで取り上げてくれることは有難いことだし、今後ともそれは頼わしいことである。興奮をつくると言っても、文化財に関する知識を宣伝し、或は啓蒙普及するにしても、個人の方ではどうしようもないことである。やはり新聞批評、ラジオ、テレビ等の協力を待たなければならない。一流の新聞が書き立てくれれば、その効果は大いなるものである。ただこの際注意すべきことは、考古学を"化度様様記"式の珍奇な新聞ジャーナリズムなどと、いたずらに考えられていては困るのである。地下から多少妙なもの、或は珍奇なものを掘り出したから新聞にするとすれば、それは考えて見ねばならぬのである。とかく今の新聞記者諸君は多分にそうした傾向がある。表題や、副題をつけるのに、日本一或は世界最大とか、最古とか言いたがる。そうでないと取りあわないのである。実はこの度ともなれば、相当大きく発掘されて、それ程珍らしいものか、貴重なものがポカポカ発見される筈はないのである。正直に言えば、出て来たものは極めてありふれた平凡なもので、ただその例数を増したに過ぎないようなものが大部分である。それでもそれはその地方の、或はその時代の一つの解明にはなっているのである。つまらぬものもしか出ず、平凡なことしかわからなくても、それを積み上げれば一つの立派な仕事になるのである。こうした事実をジャーナリスト自身も理解し、考古学者と緊密にそれと結ばなければならない。そうした時に、はじめから、ある一つの仕事に対する計画の解明が大事になって来るのである。それにはある遺跡の発掘に赴く時には、充分に準備をして、今回の発掘はどうゆう目的で施行するのか、そして何が出ると予想されるか、それによって何が解かりそうかを文書として用意して行く必要がある。そして一人のその発掘団のspokesmanから、それが最初から解説的に新聞記者諸君に話なされる必要がある。これは理解あり、知識ある新聞記者諸君は既に実行していることである。そして最後には座談会式のやり方で、そのことに関係した数名の人が、その人の立場から、やった事、発見した事物について語り、それが現在の考古学に何を寄与したかを明かにするのである。それをジャーナリズムが取りあげるようにしなければならぬ。本来考古学は地味な仕事だと言われる。ところが実際は随分ジャーナリズムに来ってはでだてしく評さ

11号－3

れる。ハデとか、地味とかそう問題は別として、とに角漸進的に文化財の意味が一般の人々に理解されて行くように、手堅い、しかしたゆみなき仕方でジャーナリズムと結合して行くべきで、珍奇とか、最大最古で結びついていては、種子はすぐに尽きてしまうのである。

5　とに角、全体としては中央博物館があって、すべてその下に研究や発掘が統合されることが一番望ましい。勿論そうなっても細かい点については自由であるべきである。又出て来るものにバライエティがある限り、テーマをそれ程一目的に統合することは出来ない。然し何か共通性があるとか、大方針のあることは決してマイナスにはならぬのである。ひしる現在のように各大学が勝手に考古学をやり、研究者を養成しているかと思うと、その卒業生の大部分が、その知識を生かして生活して行く方法がないために、全く別の途へ行ってしまう。こんなことを何十年繰り返しても、日本の文化財は完全には護られず、文化財行政は成功しないのである。思いきって考古学、民俗学者を国で全部養成し、国でその職場を設けることをしなければいけない。そうした時にはじめて、この国の文化財は完全に護られ、遺跡の発掘が許可制になる意味も判然りして来るのである。

—以上—

新収図書目録

番号	著者	題目	種類	寄贈者	図書館	月日	備考
1115	国宝保存会大和支部	博物館令和実施博物館	パンフレット別刷	博物館令会	レ	12月23日	
1116		埼玉県古墳出土遺物概報 1957.7.2		植田陸奥	レ	〃	
1117		第12回日本人類学会・日本民族学会連合大会講演要旨	パンフレット	金関丈夫	レ	〃	
1118		荒川村誌要覧	〃	波辺信一	レ	〃	
1119		北海道白川村の風物	単	〃	レ	〃	
1120		埋蔵文化財遺跡が荒川村になぜ多いか	パンフレット	〃	レ	〃	
1121	人谷	修証義	〃	東大寺別院	レ	〃	
1122	九鬼	国学院大学生活	単	博物館令会	レ	〃	
1123	静岡考古学会	考古館報 1957. No.4 7.8合併号	パンフレット	その館	レ	〃	
1124	山本孝文	山賀崇考古図(下)	〃	山本孝文	レ	〃	
1125		Bulletin de la Société Préhistorique 1957 5:6	誌	(購入)	レ	〃	
1126		人文学 30 1957.6月	〃	同志社大学人文学会	レ	〃	
1127		人文学 31 1957.11月	〃	〃	レ	〃	
1128		博物館研究 Vol30. No.12	〃	(見本入)	スミ	昭33 3.4	

11号－4

番号	著者	題目	種類	寄贈者	図書館	月日	備考
1129		博物館学研究 Vol.31 No.1	雑誌	(購入)	スミ	2月4日	
1130		全国大学博物学協会 会報	パンフレット	その会	レ	〃	
1131	国学院大学	考古学資料目録	〃	国学院大学	レ	〃	
1132		立教大学博物館研究 No.1	〃	立教大学	レ	〃	
1133	文部省	社会教育関係法令集	〃	文部省社会教育課	レ	〃	
1134	日本博物館協会	博物館関係法令	〃	日本博物館協会	レ	〃	
1135		昭32年度修学要項	〃	立教大学	レ	〃	
1136		親鸞聖人教育資料 第2集	単行本		レ	〃	
1137		くしろ摩周阿寒自然公園新立案書	パンフレット	その会	レ	〃	
1138		月刊 本津温泉 えびす屋	〃	えびす屋	レ	〃	
1139		浅草の空 1957年12月	〃	トーリスト ビューロー	レ	〃	
1140		Roka garden	〃	後閑評	レ	〃	
1141		陳情書(案)	プリント	全日大学博物館協議会	レ	〃	
1142		会報 I 1957.12	パンフレット	全日大学博物館協議会	レ	〃	
1143		〃 II 1958.1	〃	〃	レ	〃	
1144	同人社研究所	資料目録 Vol.3 No.2 1956.4	雑	同志社資料室	レ	〃	
1145		中国殷墟芸術展	パンフレット	(購入)	レ	〃	
1146		同志社美学 4	雑	その会	レ	〃	
1147	学習院大学哲学会	やしま 5 1957.12	〃	岡田茂弘	レ	〃	
1148		博物館研究 Vol.31, No.2	〃	(購入)	スミ	〃	
1149	同人社研究所	資料目録 Vol.4 No.4 1958.1	〃	同人社研究所	レ	〃	
1150		大安 Vol.3 No.7	〃	大安書房	レ	〃	
1151		〃 Vol.3 No.8	〃	〃	レ	〃	
1152		〃 Vol.4 No.1	〃	〃	レ	〃	
1153	丸善書店	学燈 Vol.54 No.12	〃	丸善	レ	〃	
1154		大安 Vol.4 No.2	〃	大安書房	レ	〃	
1155		武相文化 102	パンフレット	石野瑛	レ	〃	
1156		〃 103	〃	〃	レ	〃	
1157		〃 104	〃	〃	レ	〃	
1158		若木考古		早稲田大学その会	レ	〃	
1159		文物交流資料 1957.11期	雑	[購入]	レ	〃	
1160		〃 1957.12期	〃	[〃]	〃	〃	

—(5)—

11号－5

掲示板

2月1日　土

今日は坂老沢小校さんの栗津氏へ嫁入れの日である。但し本人は御所高校で授業中

2月2日　日

田畑ゼミ卒業生の栗津孝一氏と予(ほく)のゼミ一坂老沢小校さんの結婚の日。藤井重兵工氏と予(ほく)の家内とが媒酌人。式は京都ホテルで盛大に行われた。

2月4日　火

オー次入学試験合格者決定の日。

2月8日　土

夜宇佐晋一氏宅の青会共の会合に出席。はじめて高速道路によって遺跡が破壊される実情を聞く。

2月13日　木

高速道路について府の対策を聞く。来大に有光教授を訪れ、更に府の長谷川氏の来室を求め、二人で長谷川氏に文句をつける。結局人もなく金もなく、府は頬かむりですごすごのもりであった。

2月14日　金

卒論試問の日。毎年のことながら。

2月15日　土

青考協の会。同志社の考古学実習室で。

2月16日　日

同志社博物館研究会で銀燈展を見学。烏丸丸太町東洋亭で懇話会を開いた

2月19日　水

実習室談話会のコンパ。

来室の側の太平楽で。

千代、池谷、石部、石附、宮森、岡田、田代、坪田、津田、鳥瀬、匠、吉川の諸君姿出席。

2月21日　金

京極寺ケの京楽でゼミのコンパ。東、田、池谷、北中、鳥越、横野君等出席。

2月24日　月

上賀茂昌蒲園で大学院学生送別会。出席者は秋山、安藤、浅倉、石田、Karni、三品の諸先生と予(ほく)と、石部、堅田、前田、宮原、中村、岡田、遠山、宇田川、谷口の諸君。この方送られるのは堅田、前田の二君。

2月25日　火

関西博物館協議会幹事会の件で天理に福原氏を訪問。大阪高島屋のA-A展(アジア・アフリカ展)の準備会場に漸く会い話す。

2月26日　水

岡田君予(ほく)の家からまることになった。この日遅く送別茶話会とやる。

2月27日　木

大学院修士論文試問会。堅田君の論文パスと決定した。

2月28日　金

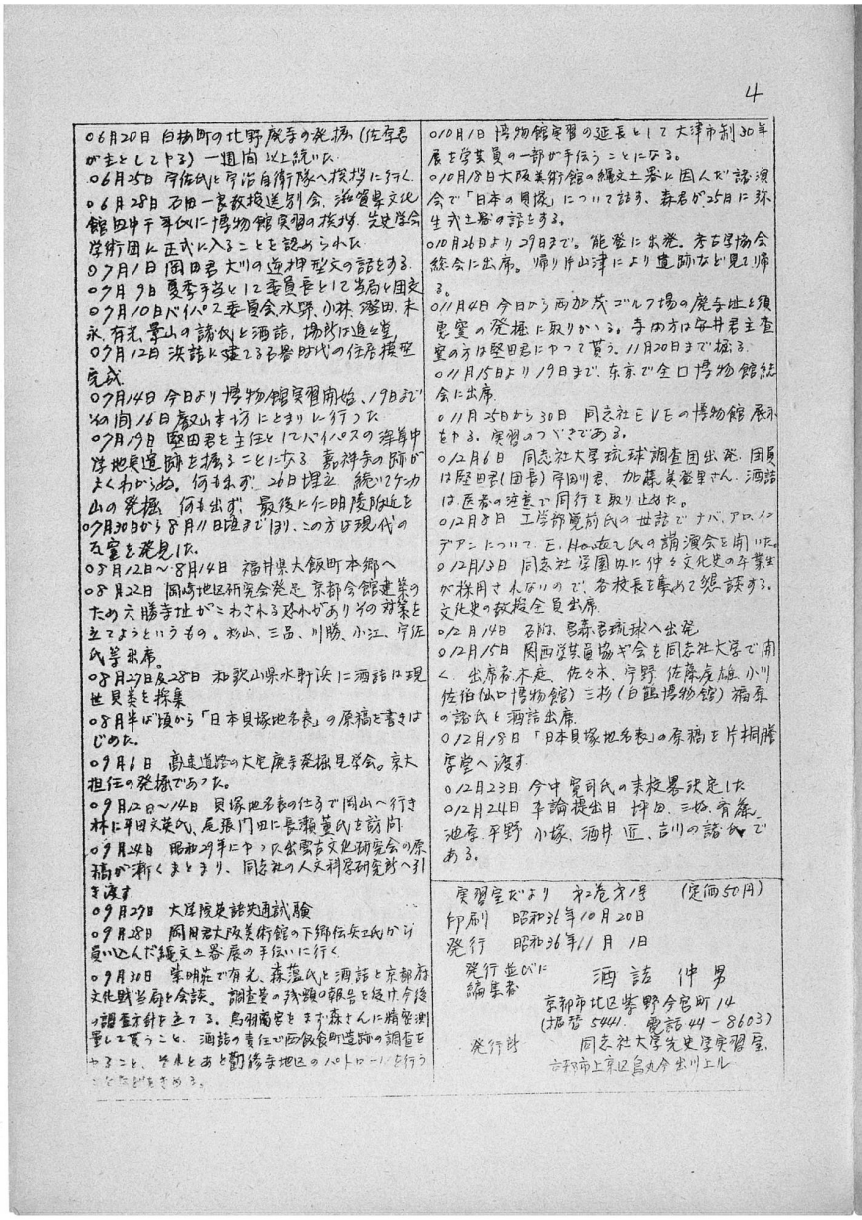
修士論文の　　文学部の綜合審査会。

(酒詰記)

編集者　岡田茂弘
発行年月日　昭33年2月21日
発行所　京都市上京区烏丸今出川
同志社大学考古学会
(代表者)　酒詰仲男

—(6)—

11号－6



4

○6月20日 白樹町の北野廃寺の発掘（佐原君が主として行う）一週間以上続いた。
○6月25日 宇佐氏と宇治自衛隊へ援護に行く。
○6月28日 石田一良教授送別会、滋賀県文化館田中千年氏に博物館実習の挨拶。先史学会学術団に正式に入ることを認められた。
○7月1日 岡田君 大川の遺跡型文の話をする。
○7月9日 夏季手当として委員長として当局に出文
○7月10日バイパス委員会 水野、小林、瀧田、末永、有光、夢山の諸氏と酒話、場所は道々堂。
○7月12日 浜詰と建てる巻 時代の住居模型完成。
○7月14日 今日より博物館実習開始、19日迄
この間16日 叡山まつりにとより レ行った
○7月19日 堅田君を主任として バイパスの発掘中 学地見遺跡を掘ることに決る。高槻寺の跡が よく わかった。何もなず 26日埋え 続いてケンカ山の発掘 何も出ず 最後に 二明陵附近を
○7月30日から8月11日迄まで掘り、この方は現代の五室を発見した。
○8月12日～8月14日 福井県大飯町本郷へ
○8月22日 岡崎地区研究会発足 京都会館建築のため六勝寺址がミわされる 及ぶ恐れがありその対策を立てようというもの。杉山、三品、川勝、小江、宇佐氏等出席。
○8月27日及28日 和歌山県水野浜に酒話は現世貝類を採集
○8月半ば頃から「日本貝塚地名表」の原稿を書きはじめた。
○9月1日 高速道路の大尼廃寺発掘見学会。京大担任の発掘であった。
○9月12日～14日 貝塚地名表の仕上で岡山へ行き林に平田文英氏、尾張門田に長瀬重氏を訪問
○9月24日 昭和29年にやっと公営考古文化研究会の原稿が漸くまとまり、同志社の人文科学研究所へ引き渡す
○9月27日 大学院英語史通試験
○9月28日 岡田君大阪美術館の下郷伝矢氏から買い込んだ縄文土器展の手伝いに行く。
○9月30日 茶明院で有光、森蘊氏と酒話と京都府文化財当局と会談。調査費の残額の報告を受け今後の調査方針を立てる。鳥羽離宮もまず森さんに精密測量して貰うこと。酒話の責任で西飯食町遺跡の調査をすること、学生とあと勧修寺地区のパトロールを行うことなどをきめる。

○10月1日 博物館実習の延長として大津市制30年展を学生員の一部が手伝うことになる。
○10月18日大阪美術館の縄文土器に関人で諮問会で「日本の貝塚」について話す。森君が25日に弥生式土器の話をする。
○10月26日より29日まで。能登に出発。考古学協会総会に出席。帰り伊山津により遺跡など見て帰る。
○11月4日 今日から西加茂ゴルフ場の廃寺址を須恵窯の発掘に取りかかる。寺田方は安井君主査窯の方は堅田君にやって貰う。11月20日まで掘る。
○11月15日より19日まで、東京で全日博物館総会に出席。
○11月25日から30日 同志社EVEの博物館展示をする。実習のつづきである。
○12月6日 同志社大学琉球調査団出発。団員は堅田君（団長）宇田川君、加藤美登里さん。酒話は医者の注意で用行を取り止めた。
○12月8日 工学部覚前氏の世話でナバ、アロ、ノアアンたついて E. Hの近氏の講演会を開いた。
○12月13日 同志社学園内に伊々文化史の卒業生が採用さ れないので、各教長を集めて懇談する。文化史の教授全員出席。
○12月14日 石田、宮森君琉球へ出発。
○12月15日 関西学生員協ぎ会を同志社大学で開く。出席者 木庭、佐々木、宇野、佐藤虎雄、小川、佐伯（仏口博物館）三杉（白鳳博物館）福原の諸氏と酒話出席。
○12月18日「日本貝塚地名表」の原稿を片桐勝客堂へ渡す
○12月23日 今中寛司氏の来校暮決定した
○12月24日 卒論提出日 坪田、三品、有森、池原、平野、小塚、酒井、近、吉川の諸氏である。

実習室だより 第2巻第1号 （定価50円）
印刷 昭和36年10月20日
発行 昭和36年11月1日
発行並びに編集者 酒詰 仲男
京都市北区紫野今宮町14
（振替 5441 電話 44－8603）
発行所 同志社大学考古学実習室
京都市上京区烏丸今出川上ル

12号－4

1

実習室だより

第2巻第1号

1961年11月1日

御挨拶

実習室だよりは昭32(1957)年4月から 昭33(1958)年2月まで続けただけで終ってしまった。その小以来考古学専攻生も増加し、大学院の方にも多くの在学生がいて、こうして本を続けるよう各方面から要求さ れるが 仲なかなかの難かが 熟さなかった。然し今回軍津(海老沢)小校姉が 仕るの一筋を引き受けて良かったので、久し振りで復刊することにした。この印刷物は学問的なむづかしいことは書かないで、文字通り実習室だよりとしたい。どうか実習室の関係者の告知板として今後愛読して頂きたいし又卒業生諸氏の最近の消息をじじしじし投稿して欲しい。

近況

まず先生のことから。石田一良教授は昭33(1958)年3月で同志社を退職、東北大学へ転任した。昭和34(1959)年 甲賀寅雄教授は 定年で 辞職した。文三郎彰史教授は昭35(1960)年9月大阪市立厂史博物館長に就職するため同志社を辞任した。石田一良教授の代りに今中寛司教授が就任し、甲賀寅教授の代りには永井三明専任講師が就職した。その小 理任は 水木 ラの諸 先生と 武山教授と 安藤教授と Otto Cary教授と竹田教授と 浅香昭教授と 小川助教授と 大下専任講師と酒詰(教授)という陣容である。

こ小等のうち 武山、安藤、今中の三教授と酒詰が大学院を担当している。

竹田教授は 脊髄に腫瘍が出来、京大病院に入院 9月13日に手術し、その後経過は順調であるが今年一杯ぐらいは 出校出来ないらしい。

卒業生は以下のとくである。（敬称略）

1954年

安井 良三 [illegible] 大学院博士課程と任学 大阪市立厂史博物館に勤務

1956年

大岡 元 [illegible] 四国

栗津(海老沢)小枝 [illegible]
(電 [illegible])2人の母
細川(本間)男美子 [illegible]
(電 [illegible]) 1人の母
塙田登一 [illegible]
四天王寺高校 昨年結婚した
福井 博作 [illegible] 味の素
大阪本町 [illegible]
岸 恵晴 [illegible] 中間
高校 2人の父
喜多正明 [illegible]
方 同志社香里高校 本年春結婚した
物川 英治 大阪府城平古郵大迫郵便局 最近結婚した。
宮沢正典 [illegible] 同志社女子高校
宮沢(鵜塚)博子 同上 [illegible] 川女子高校
沢田 玲治 [illegible]
竹本 修吾 [illegible] 早稲田経営
宇田川 誠一 [illegible] 大学院
吉川 隆 [illegible]
安田 裕保 [illegible] ガラス器製作、今年結婚した

1957年

甲斐 らく子 [illegible]
斉藤 福輔 [illegible] 大阪印刷インキ
小林 正義 [illegible] 大阪中央郵便局
斗口郵便局
外名 瑞次 不明
大森 保一 [illegible]
沢田 一 [illegible]
大正住電株式会社
鈴木 豊治 [illegible] 宮崎県立博物館
(旧姓)
鈴木(中村)直子 [illegible] 2人の母
武田 花治 [illegible] 杉山市
仲村(山本)明子 [illegible]
京、大学院仲村研究室夫人
安井(小坂)勢子 安井良三君夫人

1958年

この時点 [illegible]

12号－1

※個人住所は意図的に不鮮明にしている。

東宏美
池谷和三　県立相良高校
加藤三郎　長谷川方(アパート5号)市立図書館
北中厳　関西産業K.K.
福竹(富瀬)晃栄　〃女の子
榎野和晃　福徳相互銀行

1959年

平野多加文　大阪市梅田第一生命ビル　諸岡新聞(板送)大阪支局
石部嘉子(坪田)　小西広深方
池原正紀　電波技術社編集部
小塚清勝　小塚深時計
斉藤剛　東京中央郵便局
西井美樹子　京阪電鉄K.K.人事部(84-3581-5)
匠咲子　シューパーマーケット
吉川洋子
三谷敏夫
武内貞信　長野県大町市立病院内

1960年

東正尚　日本道路公団
池田東穂　矢崎日産住宅祭　矢崎日産自動車販売K.K.
西村雅郎　日本伸銅K.K.
上農清一　能本農協事務室

1961年

石附喜三男　大学院
宮森正勝　美幌高校
石田太一郎　大学院

津田克彦　エトーガンK.K.

大学院
(博士課程)
安井良三　前出
石部正志
和泉大津高校
堅田直
岡田茂弘　奈良県立文化財研究所
(修士課程)
宇田川勝一　前出
白附喜三男　前出
石田太一郎　前出
水野正好
(修士終了)
森浩一
泉大津高校
加藤三郎　前出
喜多明(中退)　前出

重なる出来ごと(昭33年)

○昭和32年度卒論
吉田昭夫「硬玉製勾玉大珠」
東宏美「日本のケールンについて」
池谷和三「道輪考」
福竹晃栄「滋賀県の古墳」
横野和夫「南河内の古墳」
北中厳「考古学上よりみたる秋日塔婆の存在」
12月24日(火)正午より卒論切であった。
○昭33年1月10日　細川計明、宮美文学士質に人骨を持って来くる。
○1月14日　鈴木重治君と三浦教授を訪問。南海電鉄につていろいろ話を聞く
○1月15日　今日から一週間大阪府立博物館で明治文化展があり教授に同行して同志社大学から新島先生の遺品を出品した。
○1月16日　この頃から酒詰はやるやる博士論文報等に着手した。
○1月22日　石田一良教授の文学部長決定
○2月2日　栗津成一氏と坂元小校時の結婚式
田畑と一緒に酒詰がゲストとなる

○2月27日　京都で卒業生三種のコンパ
○3月26日　卒業考判定会議
○2月28日　堅田直君修士論文文学教授会パス
○3月5日　同上全学教授会パス
○3月11日　北海入試問題漏えいで大さわぎ
○3月12日　千代肇君卒業確定
○3月13日　大阪で博物館の　浜詰遺跡にブルトーザーが動いているという報告　千代君に取材現場へ行ってもらう
○3月14日　浜寺県立高野へスリッポンと五器が出ている遺跡があることを知った。この頃石田一良教授東北大へ転任の話がある。網野・千代君の案論で急に堅田君・岡田君・田代君等に行って貰うことにする
○3月15日　1日遅れで岡田君今日出発。
○3月16日　石田一良教授転任決定
○3月17日　宮塚自然動物園の100万人の子供展へ縄文の遺物出品の準備
○3月21日　卒業式　式後酒詰君で赤い羽の送別会　池谷、東、北中、福竹(富瀬)、横野、浦田(信一)、千代　堅田の諸君。今日鈴木重治君の中村直子さんとの話本きまりとなる
○3月23日　網野浜詰遺跡発掘に出発、そして3月26日までかかってやっと一応けりをつけて帰る。但し岡田君・千代君はまだ残って住居阯らしいものを掘る
○3月27日　伊勢研究室堅田直君大学院博士課程受験、大体合格ときまる。
○3月29日　両君入学決定。加藤三郎君も修士へ入学決定。
○3月30日　酒詰の仲介で鈴木重治君と中村直子さん無事結婚
○4月1日　網野の住居阯発掘を見に富瀬晃一氏と出発、岡田、宮森、田代君に会う。今回は4月4日に引きあげる。
○4月6日　関西博物館学芸員協議会の相談会を天理で開いた
4月7日　島薗さん法文社へ就職したと報告に来た。
○4月9日　入学式
○4月13日及14日　松本氏(栗津小校心卿里)の御招待で吉野の桜を見る　これが小校氏の公宴と御目にかかる最後となる。
○4月15日　大学院入学式
○4月18日　[illegible]

○4月25日関西四府を代表してバイパスのこわす遺跡をどうするかの対策を立てることを東博でひらかれた日本考古学協会総会に緊急動議で出す　これ対策委員会が出来、遺跡公園が一はだぬぐことになった。4月28日帰宅。
○4月29日　情報処理研究会で大阪府教育団(東岡市)を見学　木庭さんの世話になる。この頃酒詰の芸組委員長就任愈々決定的となる
5月3日　岡田、津田、宮森、石附の諸君と福井県若狭本郷の対岸大島村の古墳群等を見に行く。野尾商店小栗氏の斡旋による　5月5日帰宅
○5月8日　宇治自衛隊へバイパスの遺跡発掘応援依頼に行く
○5月11日　大阪美術館で関西博物館学芸員協議会開催
○5月13日　演習の写真を撮る　坪田さんだけ休む
○5月17日　白石辺道会堂で水野さん、末永さん、小林さん、有光さん遺跡とバイパス対策委員会。この日夕方から翁亭で大学院のコンパ
○5月19日　同志社共済組合総会
○5月20日　宇治自衛隊幹部と芝町遺跡等を予算　宇佐晋一氏、小川敬夫氏、同伴。
○5月23日　山科遺跡写真撮影の件で伊丹総監部へ行く
○5月24日　八尾飛行場へ同じ件で交渉に行く。
○5月27日　琉球行きの相談開始
○5月29日　大八木文化財課長と宇治自衛隊へ発掘延期の了解を得に行く
○5月31日　文化財の人と自衛隊の人と現場に行ってどこか掘って良いのか悪いのかを良しかめる。
○6月4日　午前から芝町弥生式遺跡の発掘準備、岡田、石附、大下、林、柳岡の諸君。今日幽霊逆襲なる芸園に動員した千代君から紹介状をもって生徒4人来る。宮森君に京大資料室などを案内して貰う。
○6月5日　自衛隊の協力による芝町弥生式遺跡の発掘開始。この日遺跡公園側と激しい抗議　柴田荘で遺跡調査協議会、杉原、藤田、末永、村田、水野、有光、小林、石田、田代、坪井(弟)、角田、酒詰が関係側から出席。
○6月9日　八尾飛行場へ写真を受け取りに行く
○6月10日　芝町の荷物引きあげ
○6月16日　朝鮮料理でビヤコンパ
○6月17日　芝町新聞の関係で森浩一君止むを得ず退学

12号－2

12号－3

※個人住所は意図的に不鮮明にしている。